

問1 大正期に展開された女性の保護をめぐる論争において、国家による財政支援や保護を求める立場に対し、女性が国家に依存することを批判し、まずは女性自身が職業を持って経済的に自立すべきであると主張した歌人・思想家は誰か。 (2024年 全国公立入試 類似)

1. 与謝野晶子 2. 野上弥生子 3. 長谷川時雨 4. 宮本百合子

問2 江戸時代において、仏教や儒教などの先入観を排し、古典を原典に即して客観的・実証的に読解する文献学的方法を確立した。徳川光圀の委嘱を受けて『万葉集』の注釈書を著し、のちの国学の先駆者となった人物は誰か。 (2017年 全国公立入試 類似)

1. 真淵 2. 宣長 3. 篤胤 4. 契沖

問3 朱子学の思弁的な「理」の探求を批判し、『論語』などの原典に直接立ち返る学問を提唱した京都の儒学者。彼は、道徳の根本である「仁」を、特別な修行によって得られるものではなく、日常の人間関係において互いに偽りなく他者を愛し、思いやりを掛け合うことであると説いた。この人物は誰か。 (2023年 全国公立入試 類似)

1. 荻生徂徠 2. 伊藤仁斎 3. 中江藤樹 4. 山鹿素行

問4 西洋の近代化が内側から自然に発展した「内発的開化」であるのに対し、明治以降の日本の近代化は外部からの圧力によって急激に進められた「外発的開化」として指摘し、日本人が主体性を失わないために「自己本位」の確立を説いた、明治・大正期の文学者・思想家は誰か。 (2021年 全国公立入試 類似)

1. 夏目漱石 2. 志賀直哉 3. 坪内逍遙 4. 島崎藤村

問5 幕末の日本において、天道にかなう生き方とは、功名や利欲を離れて純粋な心情に徹し、己の「誠」を尽くすことであると主張した思想家がいた。彼は、主君に忠を尽くす勤皇の精神がこの「誠」の実践を通じて天道に通じると捉え、のちの尊王攘夷運動に強い影響を与えた。松下村塾を主宰し、多くの門下生を育てたこの人物は誰か。 (2012年 全国公立入試 類似)

1. 橋本左内 2. 吉田松陰 3. 横井小楠 4. 佐久間象山

問6 仏教伝来後、日本の伝統的な神々への信仰と外来の仏教信仰が融合・調和していった現象を何というか。初期には神の前で経典を読み上げるなどの行為が行われ、のちに神を仏の仮の姿とする思想へと発展した。 (2014年 全国公立入試 類似)

1. 神仏分離 2. 神仏習合 3. 廃仏毀釈 4. 神儒一致

問7 古代の日本において、神に対するとき最も重んじられた、神を欺いたり自分を偽ったりすることのない、純粋で曇りのない心のあり方を表す言葉として最も適当なものを、後の選択肢から一つ選べ。 (2019年 全国公立入試 類似)

1. 赤き直き心 2. 清き明き心 3. 清き直き心 4. 黒き汚き心

問8 主著『善の研究』において、主観と客観が対立する前の直接的な経験のあり方を重視し、自己と世界が一体となる「主客未分」の境地を説いた、京都学派の形成にも大きな影響を与えた近代日本の哲学者は誰か。 (2016年 全国公立入試 類似)

1. 三宅雪嶺 2. 西田幾多郎 3. 井上哲次郎 4. 和辻哲郎

問9 日本の思想家である和辻哲郎は、人間を単なる孤立した個人として捉える西洋的な見方を批判した。彼は、人間は他者との関係性において初めて真の自己として成立する共同体的な存在であると主張したが、このような人間のあり方を何と呼ぶか。 (2024年 全国公立入試 類似)

1. 行為的直観 2. 風土的自己 3. 歴史的な身体 4. 間柄的存在

問10 宋から帰国して臨済宗を伝えた僧が著した書物で、禅の教えは国家を護り安寧をもたらすものであると主張し、比叡山などの旧仏教勢力による禅宗停止の動きに対してその正当性を弁明した著作は何か。 (2017年 全国公立入試 類似)

1. 『興禅護国論』 2. 『普勸坐禅儀』 3. 『喫茶養生記』 4. 『立正安国論』

答え合わせ・解説 No.3

問1	答え 1 与謝野晶子	平塚らいてうが女性の妊娠・出産期における国家の保護を求めたのに対し、与謝野晶子は国家への依存を批判し、女性の経済的自立を第一に主張した。この対立は当時の女性解放運動における重要な思想的論争となった。
問2	答え 4 契沖	仏教や儒教などの先入観にとらわれず、古典の言葉そのものを客観的・実証的に研究する文献学的方法を確立した。徳川光圀の依頼により『万葉集』の注釈書である『万葉代匠記』を著し、のちの国学の形成に決定的な影響を与えた。
問3	答え 2 伊藤仁斎	朱子学の抽象的な「理」の探求を批判し、『論語』や『孟子』の原典に直接立ち返る古義学を提唱した京都の儒学者は伊藤仁斎である。彼は、仁を日常の人間関係における「愛」や「思いやり」の具体的な実践として捉え、特別な修行や禁欲を必要とするものではないと説いた。
問4	答え 1 夏目漱石	日本の近代化が西洋文明の急激な受容による「外発的開化」にとどまり、内面的な発展を伴わない上滑りの状態にあると批判した。彼は、他者の評価に流されることなく、自らの価値基準に従って生きる「自己本位」の重要性を主張し、のちに「則天去私」の境地へと達した。
問5	答え 2 吉田松陰	吉田松陰は、幕末期において独自の天道観を展開した。彼は、功名や利欲を離れて純粋な心情に徹し、己の「誠」を尽くすことこそが天道にかなう生き方であるとした。そして、主君に忠を尽くす「勤皇」の精神は、この「誠」を尽くす実践を通じて天道に通じるものであると捉えた。彼の思想は松下村塾を通じて高杉晋作や伊藤博文などの門下生に受け継がれ、幕末の尊王攘夷運動の精神的支柱となった。
問6	答え 2 神仏習合	日本古来の神々への信仰と、伝来した仏教とが結びつき、融合・調和していく現象を指す。初期には神々も仏法によって救われるべき存在（迷える衆生の一つ）とされ、神前での読経や神宮寺の建立が行われた。のちに、神を仏の仮の姿とする本地垂迹説へと展開し、明治期の神仏分離令にいたるまで日本の信仰の基盤となった。
問7	答え 2 清き明き心	古代の日本人は、神を欺いたり自分を偽ったりすることのない、純粋で曇りのない心性を重んじた。これを「清き明き心」（または「清明心」）と呼び、のちの「正直」や「誠」といった日本思想における道徳観の源流となった。これは単なる道徳的な正しさだけでなく、神聖なものに対峙する際の宗教的な清浄さも意味している。
問8	答え 2 西田幾多郎	『善の研究』を著した西田幾多郎は、主観と客観が対立する前の直接的な経験である「純粹経験」を哲学の出発点とした。彼は東洋的な無の思想を取り入れながら独自の哲学体系（西田哲学）を築き上げ、のちの京都学派の祖となった。
問9	答え 4 間柄的存在	和辻哲郎は、人間（じんかん）という言葉が「人」と「間（あいだ）」から成り立つことに着目し、人間は孤立した個人ではなく、他者との関係性（間柄）の中で生きる存在であるとした。この独自の人間観を「間柄的存在」と呼ぶ。
問10	答え 1 『興禪護国論』	荣西は、禅の教えが国家を護る（護国）ために有用であることを説き、旧仏教側の批判に反論するために『興禪護国論』を著した。この著作を通じて、禅宗が国家の安寧に寄与する正統な仏教であることをアピールし、幕府などの権力者からの支持を得る契機となった。